

◆平城京左京三条二坊二坪（長屋王邸）の 調査 — 第303-8次

1. はじめに

調査地は、奈良市二条大路南1丁目、平城京左京三条二坊二坪の西南隅に当たる。二坪を含め、一・二・七・八坪の四つの坪は、奈良時代前半には、長屋王邸ついで光明皇后の宮であったと考えられている。本調査地はちょうど長屋王邸の西内郭南半部に当たり、長屋王の子女やその母たる長屋王の妻妾が居住していた「西宮」と呼ばれる空間とみられ、重要な遺構の検出が予想された。今回、店舗建築に伴う事前調査として、東西14m、南北10m、面積140m²の発掘区を設け、1999年12月8日から27日まで調査を行った。

2. 検出遺構

調査区の層序は、近年の盛土、耕土、黒褐粘質土（遺物包含層）を経て地山である青灰粘土層となり、この面で検出を行った。検出面の標高は59.80m前後である。池

1基、溝1条、小穴2基などを検出した。

SG7750 奈良時代前半の曲池。今回はその東北部を検出した。池の汀線は調査区東端中央からやや弧を描きながら西北西に向かい、調査区北西端で北西方に潜る。池の斜面は汀線に沿う形で、幅0.6~1.5mの帯状に径4~7cm程度の礫を敷きつめた洲浜敷護岸となっている。洲浜斜面部の勾配は一様でないが18%前後。池の水深は池の一部を検出しただけであり不明だが、残る洲浜の中間に水面を想定すれば(W.L.=59.9m)、調査区南端で約20cmである。池底は粘土質の地山で、礫敷は確認しなかった。景石についてはあったかどうか不明である。

池の規模は検出した範囲で、東西14m以上、南北10m以上。全体像は不明だが、調査区の東約11mで実施した第291次調査(1997年度)では池を確認していないことから、池の汀線は調査区外の東でほどなく南折するものと推測できる。北西端の汀線の行方は近隣調査例がなく不明であるが、池が本調査区の北・西さらに南に延びるも

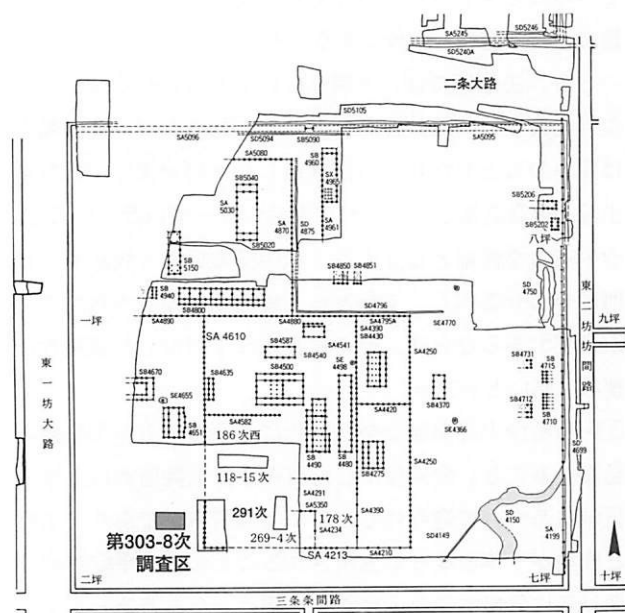


図69 調査区位置図



図70 SG7750 (北西から)

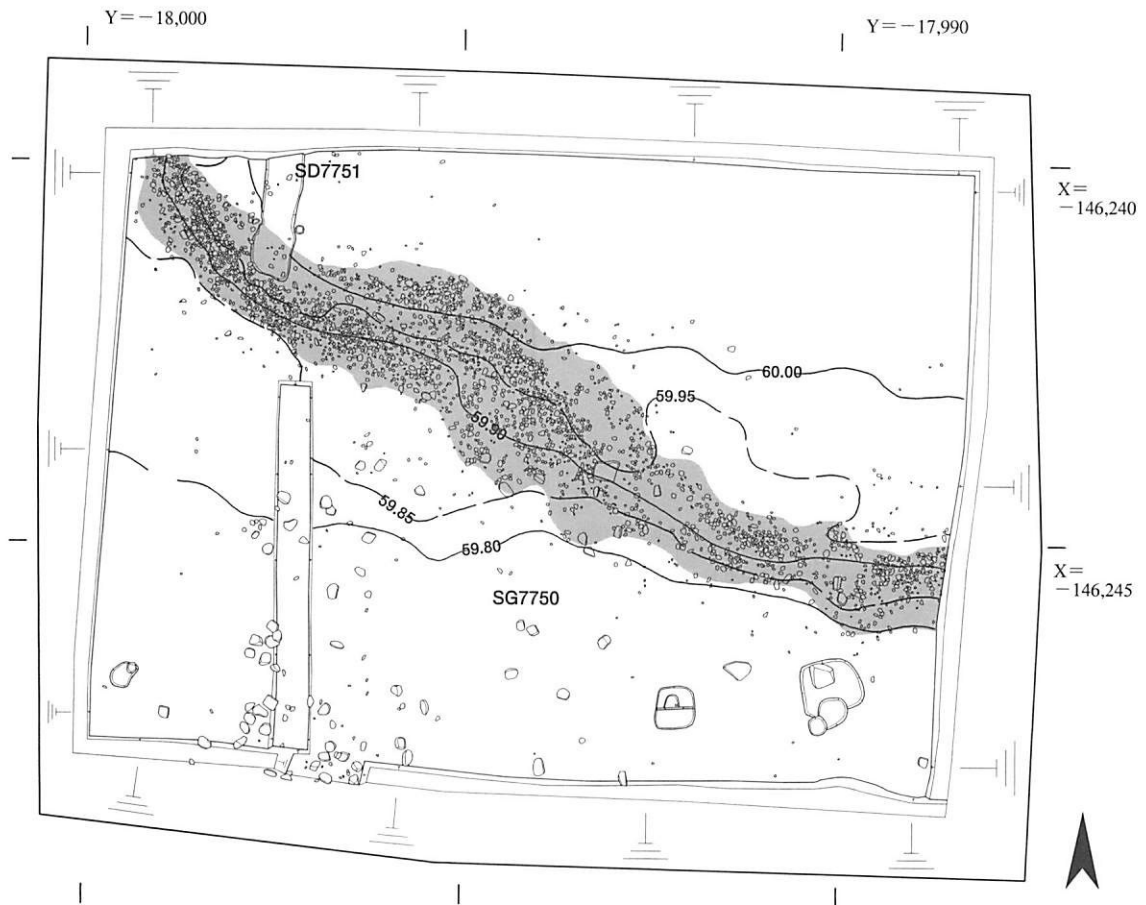


図71 第303-8次調査遺構平面図（色付け部分は洲浜敷）1：100

のであったと想定することもできよう。池への導水経路は不明だが、北西方の東一坊大路東側溝からなされたのかもしれない。

池が平城遷都当初に遡るか否かは分からないが、池埋土には編年Ⅲ期の土器が多く含まれていることから（Ⅲ古段階も含む）、池の造営は長屋王邸の時期に遡るものであり、土器Ⅲの段階、すなわち皇后宮の時期以降に池が廃絶したものと推測される。

SD7751 調査区西北で検出した南北溝。SG7750の洲浜敷を切っており、池廃絶後の遺構である。

なお今回は奈良時代後半代の顕著な遺構を確認できず、後半期の様相については不明。

3. 出土遺物

池の洲浜敷上面及び池埋土から土器・瓦埴類が出土した。土器は須恵器が多く、その年代は平城宮土器編年Ⅲ期が中心である。墨書土器は3点出土し、うち1点は「酒」、1点は「□[造カ]」と記す。軒瓦は7点出土した。6272A・6284C型式（Ⅰ-1期。長屋王邸期）が各1点、

6135B・6719A（Ⅱ-2期。皇后宮期）がそれぞれ3点・1点、6282Bbが1点である。丸瓦が13.8kg119点、平瓦が56.7kg398点、埴が7.5kg5点出土した。

4. まとめ

一・二・七・八坪の四町域において洲浜敷きの曲池を検出したのは今回が初めてである。四町内における園池遺構としては、長屋王邸時代の七坪東南部の蛇行溝SD4150が知られるだけであったから、今回の発見により、長屋王邸での複数の園池の存在を考慮する必要が出てきたことになる。『懐風藻』には、田中朝臣浄足が長屋王邸で「西園」の園池を詠じた漢詩がみえ、従来これを邸宅東南のSD4150に比定することもあったが、「西宮」に位置するSG7750こそよりふさわしいと言えよう。この比定が妥当か否かは今措いておくにしても、ともあれ、調査例が少なく不明な点が多い二坪の様相を窺う上で、SG7750の発見は貴重である。ただ、調査面積が小さく、SG7750を含む園池の全体規模やその意義づけについては、周辺調査の成果をまわって論じたい。（山下信一郎）